二〇二二年度　大阪星光学院高等学校　入学試験問題

国　語　（その1）

一、次の文章を読んで、後の問いに答えなさい（設問の都合上、省略した部分があります）。

北海道で淳子が経営する新美農場は、馬鈴薯の収穫期を迎えている。今期は夫の孝宏と、従業員の安井、芙美、レンの三人に加え、叔母の紹介で、東京の総合商社の本部長として定年まで勤めていた斉藤という男が収穫に参加していた。

金曜日まで、収穫作業は順調に進んだ。週の後半は雲が多かったものの、かろうじて雨は降らず、馬鈴薯の育ちぐあいも悪くなかった。五日間の収量は淳子の予想を上回っていた。

①唯一の悩みの種は、斉藤だった。

「なんなんですか、あのひと？」

はじめに音を上げたのは、芙美である。初日の作業が終わり、迎えにきた妻の車で斉藤が帰っていった後、淳子をつかまえて訴えた。

「べらべら喋ってばっかりで、ぜんっぜん手が動いてないですよ。しかも、五十億の商談をまとめただの、部下が百人いただの、銀座の高級クラブの常連だっただの、自慢話ばっかり」

淳子も一度、斉藤とふたりで馬鈴薯の選別作業にあたったので、芙美の言いたいことはよくわかった。わかるもなにも、そっくり同じことを思った。だから、斉藤と組むのはその一度きりでやめた。ただでさえ大変なのに、そんなところでいらいらして神経をすりへらしていては、多忙な収穫期を乗りきれない。

「あと文句も多すぎ。足がだるいとか、腰が痛いとか。あげくの果てに、なんて言ったと思います？　こんな単純作業は機械化できないんですか、人間のやる仕事じゃないですよ、ですって。ろくにできていないお前が言うなって感じ」

芙美は鼻息荒く言い募る。

「わたしたちのこと、ばかにしてません？　＊羊蹄山のお祈りだって、鼻で笑ってたし」

なるほどね、農村の山岳信仰ってやつですか、と斉藤はせせら笑ってみせたのだ。田舎者の迷信だと決めつけられたようで、淳子もかちんときた。

「社長、ひとが好すぎます。そりゃあ奥さんには同情するけど、あんなの押しつけられて、こっちだって迷惑でしょ。ａタクジショじゃあるまいし。本人が感謝してるならまだしも、こんなのは俺様の仕事じゃない、っていばるんだから」

「まあまあ。肉体労働に慣れてないから、疲れて愚痴っぽくなっちゃうんですよ。初心者なんだし、しばらくは大目に見てあげましょう」

横で聞いていたレンが、芙美をなだめた。

「定年後って、精神的にもきついんですよ。世間に置いていかれる気がしてあせるから。それでどうしても、古きよき時代を思い返してしまうんでないかねえ」

似たような経験があるからか、安井も斉藤に同情的だ。

「あと、うまくできないのが、内心では悔しいんでないかい。それでつい、憎まれ口をたたくのかもしれない。負け惜しみっていうか、やつあたりっていうか」

「みんな心が広いなあ」

芙美がため息をつく。

翌日は早朝から小雨が降り出し、三人の従業員には連絡を入れて休んでもらったが、連絡のつかなかった斉藤だけが農作物の収穫に来ていた。

昼になっても雨はやまなかった。休憩時間に、淳子たちは斉藤を家に招き入れ、三人で食卓についた。

淳子と孝宏はゆうべのカレーをあたため直し、斉藤は弁当を開いた。初日と同じく、色とりどりのおかずがぎっちりと詰められている。

「これ、うちのですよ」

斉藤が箸をとり、黄色いかけらをつまんでみせた。意味がわからず箸の先を見つめている淳子の横から、孝宏が相槌を打つ。

「ポテトサラダですか。おいしそうですね」

bイッパク遅れて、淳子にも合点がいった。

「ああ、おとといの」

夫を迎えにきた斉藤夫人に、掘りたての馬鈴薯をいくつか渡したのだ。とても喜ばれた。あんなに感じのいい妻が、なぜよりにもよってこの亭主と結婚したのか、つくづく謎だ。

食事中、聞き上手の孝宏を前にして、斉藤はいつにも増して饒舌だった。本部長時代の武勇伝、というか自慢話を延々とcヒロウし、弁当箱が空になっても喋り終える気配がない。この天気ではあせってもしかたがないので、淳子は放っておくことにした。熱い茶を三人分淹れて食卓に戻ったら、話題が変わっていた。

「きみも大変だね、週末まで働かされて。家事も手伝ってるんでしょ？」

「繁忙期くらい、僕にできることはやりたいんです。逆に、冬の間は彼女が家のことをやってくれてますし」

器用に家事をこなす婿の姿を見て、孝宏くんが気の毒だべ、と父もよくA眉をひそめていたものだ。夫婦の間で対等に分担しているのだと説明しても、理解できないようだった。

淳子はテーブルを離れて、窓の外をのぞいた。午前中よりも雨足が強まってきたようだ。淳子の胸にも黒雲が広がっていく。

「台風、今どのへんかな」

斉藤の声を、背中で受けた。

「そうとうでかいらしいね。予報では、明日あたり北海道の上を通るって」

警報が出て休校になるのを待ち望む子どものような、そわそわした口ぶりだった。実際のところ、堂々と休めてうれしいのかもしれない。

淳子はゆっくりと振り向いた。斉藤が携帯電話の画面を孝宏に見せている。

「ほら、進路予想。こりゃあ直撃したら大事だな」

どれだけ大事か、わかってから言ってもらいたい。長雨が続くと、収穫作業がd滞るばかりでなく、地中で芋が腐るおそれもある。豪雨で畑が冠水して芋が流されてしまった年も、雨に打たれてeドロまみれになりながら手で掘った年もあった。どちらも大事で、そして悲惨だった。

「予報もころころ変わりますからね。案外、手前でそれるかもしれませんよ」

仁王立ちしている妻を横目でうかがいつつ、孝宏が答えた。

「斉藤さん、今日はもういいですよ」

淳子は静かに言った。

「雨もひどくなってきたし、早めに帰って下さい。孝宏、車で送ってあげて」

「②でも、ニンジンの続きは？　雨でもやるんでしょう？」

喜ぶかと思いきや、斉藤は不服そうに問い返してきた。突然、しかも一方的に帰れと言い渡されたのが、気にさわったのだろうか。

「大丈夫です。わたしたちふたりでやりますから」

ため息をこらえ、淳子は即答した。あんたがいようがいまいが、なんにも変わらない。むしろ、いないほうがはかどる。

「そうですか。わかりました」

斉藤がつまらなそうに腰を上げた。孝宏も席を立つ。

「お気をつけて」

われながら、Bおざなりな声が出た。孝宏と連れだってリビングを出ていこうとしていた斉藤が、ドアの手前で振り向いた。

「そうだ、奥さん。例のあれ、昨日はちゃんとやりました？」

「はい？」

「あのお祈り。山を拝むと晴れるんでしょ？　なんなら、今から三人でやってみます？」

「けっこうです」

つい、きつい口調になってしまった。さすがの斉藤もひるんだのか、わずかに顔をひきつらせた。

「そんな、こわい顔しなくても。冗談ですよ、冗談」

わざとらしく浮ついた調子で、茶化すように言う。

「冗談じゃない」

吐き出すように、淳子はつぶやいていた。

「わたしたちは真剣なんです。生活がかかってるんです。そうやってばかにするの、やめてもらえません？」

「ちょっと、淳子さん」

と遠慮がちに割って入ろうとした孝宏の隣で、斉藤が淳子をきっとにらみつけた。

「ばかにしてるのは、どっちですか」

（その3）

ぼそりと言う。先ほどとは顔つきが変わっていた。お得意の、相手を見下すような薄笑いともまた違う、暗く険しい目つきだった。
「あんたたちこそ、おれのことをばかにしてる。どこにも行き場のない、かわいそうな負け犬だって」
「そんなことは……」
ない、と言いきれず、淳子は口をつぐんだ。
斉藤たちが出ていった後、淳子はソファにへたりこんだ。寝転がって、目をつぶる。降りしきる雨の音が窓越しに響いてくる。
ばかにするな、と言ってやりたかった。この一週間ずっとがまんしてきたのだ。とうとう口に出せてすっきりしてもいいはずなのに、どうしてこんなに気が塞ぐのだろう。
よく考えてみれば、いくら斉藤が鈍感でも、役に立てていない自覚がないはずはない。長年勤めあげた会社から放り出され、家にも居場所がなく、妻の知人の厚意にすがって得た仕事も満足にこなせないとなれば、自尊心が傷ついて当然だ。
ばかにするなと抗議したかった。けれど、傷をえぐるつもりもなかった。
③起きあがる気力がわかない。やがて、雨の音に重なって、車のエンジン音がかすかに聞こえてきた。孝宏だろう。
孝宏にも迷惑をかけてしまった。謝らなければいけない。玄関のドアが開く音がして、淳子がのろのろと体を起こしたところで、電話が鳴った。
「もしもし、新美さんのお宅でしょうか」
上品な女性の声には、聞き覚えがあった。
「斉藤でございます。主人がお世話になっております」
「こちらこそ」
反射的に応えながら、淳子の胸はざわついていた。
なんの用だろう。夫を送り届けた礼だろうか。あるいは、帰宅した斉藤が、もうあそこでは働きたくないと言ったのだろうか。斉藤のことだから、お前から連絡しておけと妻に命じてもおかしくない。あんなふうに別れた直後で、淳子とじかに話すのもいやだろう。
「あのう、申し訳ないんですが」
心から申し訳なさそうに、斉藤夫人は続けた。
「主人がお宅に携帯電話を忘れておりませんでしょうか？」
電話を切って十分も経たずに、斉藤夫人はやってきた。淳子は玄関口で出迎え、椅子の座面に残されていた携帯電話を渡した。
「お忙しいのに、お時間をとらせてしまって恐れ入ります」
恐縮しきった様子からして、まだ先ほどの顛末は耳に入っていないようで、淳子は少しほっとした。
「全然かまいませんよ。この雨だから、今日はもう休憩しようと思って」
「お天気、早くよくなるといいですね」
夫人が心配そうに片手を頬にあてがった。
「収穫作業が遅れたら困るって、主人もゆうべから気にしてました。家でも四六時中、これで天気予報をチェックして」
もう片方の手に握った携帯電話を、ゆらゆらと振ってみせる。
「台風も、上陸したら大変だって、もう大騒ぎ。そうそう、羊蹄山にも毎日お祈りしてるんですよ。今日はちょっと効かなかったみたいですけど」
淳子は絶句した。彼女がけげんそうに首をかしげる。
「こちらで教えていただいたんですよね？　晴れるようにお願いするって」
「ああ、はい」
「よくしていただいて、本当にありがとうございます。この一週間で、うちのひと、みちがえるように元気になりました。一度きちんとお礼を申し上げたかったんです」
「いえ、そんな」
④手放しで感謝されては、かえって後ろめたい。
「主人があんなに楽しそうにしてるのって、ひさしぶりです。何冊も本を買いこんで、わたしにもいろいろ教えてくれるんですよ。農業は奥が深いんだぞ、って言って」
淳子は再びぽかんとした。なにか勘違いしたのか、夫人がきまり悪そうにつけ加えた。
「おかしいですよね、自分だって初心者のくせにね」
淳子はあわてて首を振る。

（その4）

「いえ。みんな、最初は初心者ですから」
父のもとで働きだした当初、わたしも苦しかった。わけもわからないまま作業に追われ、不満ばかりを募らせていた。なにかとしろうと扱いされて腹を立てた。
思い出して、愕然とする。わたしも今、斉藤に対して、似たような仕打ちをしているじゃないか。
「ちょっと待ってて下さい」
斉藤夫人に言い置いて、淳子は自室に駆け込んだ。本棚から農業の入門書を二、三冊引き抜き、玄関にとって返す。
「これ、よかったらご主人に」
農家の娘に生まれた淳子でさえ、農業が楽しいと感じられるようになるまでに数年かかった。そう考えたら、斉藤のほうが一枚上手だろう。自ら意欲と関心を持ち、仕事を楽しんでいこうとする気概がある。
「あらまあ、すみません。お借りします」
斉藤夫人が本を両手で受けとり、言い添えた。
「そうそう、この間のお芋もありがとうございました」
「あ、ポテトサラダにして下さったんですよね。お弁当、見せてもらいました」
うちの、と斉藤は言っていた。なんだかうれしそうだった。
「はい、半分は」
彼女が微笑んだ。
「実は、あとの半分は、主人が煮物を作ってくれたんですよ。あのひとがお料理なんて、結婚以来はじめてで、わたしもびっくりしちゃって。肝心のお味はね、とにかくしょっぱくて、飲みこむのがやっとだったんですけどね」
せっかくのお芋なのにすみませんでした、と詫びつつも、口もとはほころんでいる。
斉藤夫人を送りだすと、淳子はリビングへ戻った。食卓を片づけてくれている夫に、声をかける。
「⑤ねえ、孝宏。本部長、明日も来てくれるかな？」
「来るんじゃない？」
孝宏が答えた。
「車から降りるとき、また明日、って言ってたよ」
淳子は窓辺に近づいた。雨は少しだけ小ぶりになってきたようだ。霧雨に煙る羊蹄山に、そっと手を合わせる。

（瀧羽麻子『本部長の馬鈴薯』より）

＊　羊蹄山…別名蝦夷富士とも呼ばれる、北海道を代表する名山の一つ。淳子はこの山の麓の町で農場を経営している。

問1　線部a～eのカタカナを漢字に直し、漢字にはその読み方をひらがなで書きなさい。

問2　線部A・Bの本文中における意味として最も適当なものをそれぞれ次の中から選び、記号で答えなさい。

A「眉をひそめて」
ア　嘆きながら眉を下げて
イ　心を痛め涙を浮かべて
ウ　不快に思い顔をしかめて
エ　不安に思い表情を曇らせて
オ　感傷的になり顔をゆがめて

B「おざなりな」
ア　普段と変わらないような
イ　気持ちのこもっていない
ウ　間が抜けたような感じの
エ　いら立ちを隠しきれない
オ　はきはきとした調子の

問3　――線部①「唯一の悩みの種」とありますが、淳子の抱える「悩み」とはどのようなものですか。その説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア　収穫期の多忙なときに、ろくに手も動かさない斉藤が、他の従業員にしゃべりかけてばかりいて、他の従業員の邪魔になっているというもの。

イ　ここまでの収穫量は淳子の予想を上回っているが、東京からやってきた斉藤の手際の悪さが際立ち、収穫の総量で考えると支障が出そうだというもの。

ウ　天候にも恵まれ順調な収穫作業だったが、定年後農場を手伝い始めた斉藤から、今の収穫方法の効率の悪さを指摘され、気が晴れずにいるというもの。

エ　ここまでは順調に収穫作業が進んではいるものの、新しく農場にやってきた斉藤が、自慢と文句ばかり言って役に立たず、いら立ちが募るというもの。

オ　多忙な収穫期を、従業員が協力して乗り切っていたのに、不満ばかり述べる斉藤のせいで、従業員の気持ちが離れてしまいそうだというもの。

問4　――線部②「でも、ニンジンの続きは？　雨でもやるんでしょう？」とありますが、この時の斉藤の気持ちとはどのようなものですか。七十字以内で説明しなさい（句読点も一字に数えます）。

問5　――線部③「起きあがる気力がわかない」とありますが、この時の淳子の気持ちとはどのようなものですか。その説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア　今まで我慢し続けてきた斉藤に対する怒りをようやく伝えられたことで、それまであった緊張もほぐれ、ほっと一安心している。

イ　斉藤に直接抗議することができて気は晴れたが、自分たちにも非があったと認めて謝らなければならないと感じ、反省している。

ウ　斉藤に不満を伝えすっきりしてもいいはずが、実は自分たちの方も相手を傷つけていたことに気付かされ、憂うつになっている。

エ　斉藤にばかにするな、とやっと言えたにも関わらず、暗く険しい目つきで自分をにらんできたことが頭に残り、気落ちしている。

オ　よく考えてみれば、口達者な斉藤に不満を言っても反論されるに決まっているのに、不用意な発言をしたと思い、後悔している。

問6　――線部④「手放しで感謝されては、かえって後ろめたい」とありますが、それはなぜですか。その説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア　斉藤夫人は淳子たちのお陰で夫が生き生きと過ごすようになったと感謝しているが、淳子はそこまで面倒を見たわけでもなく、むしろお互いわだかまりを抱えていると思っていたから。

イ　斉藤夫人は淳子たちのお陰で夫が見違えるように前向きになったとお礼を述べたが、淳子はいつも斉藤に不満を言うだけで、ついさっきも斉藤と喧嘩（けんか）したので気まずく思っていたから。

ウ　斉藤夫人は淳子たちのお陰で夫がみるみるうちに元気になったと感動しているが、淳子は逆に斉藤が元気になっていくことを苦々しくみており、夫人に共感できないと思っていたから。

エ　斉藤夫人は淳子たちのお陰で夫がのびのびと楽しそうに暮らすようになったと喜んでいるが、淳子は何かを教えた訳ではなく、環境の変化が斉藤の心境を変化させたと思っていたから。

オ　斉藤夫人は淳子たちのお陰で夫が久しぶりに目を輝かして仕事をするようになったと感激しているが、淳子は逆に斉藤から気付かされることも多く、自分が情けないと思っていたから。

問7　――線部⑤「ねえ、孝宏。本部長、明日も来てくれるかな？」とありますが、淳子は斉藤のことをどう思うようになったのですか。本文全体を踏まえ、百字以内で説明しなさい（句読点も一字に数えます）。

問８　この文章の表現と内容の説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア　４０行目「斉藤はいつにも増して饒舌だった」という表現から、淳子の夫孝宏がいかに聞き上手であるかということが分かるとともに、普段は話さないような内容まで話すほど機嫌がよい斉藤の姿が鮮明に浮かび上がってくる。

イ　４７行目「淳子の胸にも黒雲が広がっていく」という表現には、かつて父から自分たち夫婦の家事分担についてなじられたことを斉藤の発言を聞いて思い出し、機嫌が悪くなっていく淳子の気持ちが隠喩を用いて示されている。

ウ　１０２行目「反射的に応えながら、淳子の胸はざわついていた」という表現から、淳子が聞き慣れない上品な女性の声を聞いて身構える様子と、この後何か予期せぬことが起こるのではないかと不安に思う気持ちがうかがえる。

エ　１５０行目「口もとはほころんでいる」という表現から、少しずつとはいえ夫が家事をするようになった斉藤夫人の喜びが感じられるとともに、今後斉藤達も淳子達のように対等に家事をするようになることが暗示されている。

オ　１５６行目「霧雨に煙る羊蹄山に、そっと手を合わせる」という表現には、この後天候が回復し収穫作業が順調に行くことを祈りつつ、気まずい状態のまま帰った斉藤とも上手くやっていけるよう願う淳子の心情が表れている。

二、次の文章を読んで、後の問いに答えなさい（設問の都合上、省略した部分があります）。

科学はなぜ信頼できるのでしょうか。信頼の根拠は、科学者たちが専門家集団として客観的な根拠をもとにしっかりとした議論を積み重ねているはずだと考えられるところに求められるように見えます。＊1人文学も「人文科学」と呼ばれたりしますが、「科学」という言葉が「客観的な議論の積み重ね」を基礎とするものを意味すると、人文学は果たして「科学」なのか、という疑問がしばしばaテイされます。例えば哲学などは、少なくとも一般的なイメージでは、それぞれの哲学者が「自分の考え」を述べるだけで一向に話が積み上がらないものと考えられているように思います。そこには「進歩」という概念が欠けているというわけです。

「科学」はそうではなく、科学者たちが共同で客観的な知を積み重ねるものであって、そちらの方がよっぽど信頼できるといわれます。誰かが＊2恣意的に設定したルールの上に成立するものではなく、同じ知の基盤の上で客観的な議論を積み重ねているのだから、素人がその内容の一々について専門的な知識をもっていなくても、十分に信頼できるとみなされるのです。

科学者たちの現場にもう少し近寄って見れば、その信頼の基盤は、より強固なものになるでしょう。科学者が「科学者」として認められるには、専門研究でしっかりした業績を上げ、承認を受けなければなりません。論文を発表する専門誌は、＊3ピア・レビュー形式を採るものがほとんどで、bケイサイの可否を決定するのはその道の専門家です。専門家が専門家としてきちんと評価できる論文以外は、科学者の「業績」としてカウントされません。この専門家によるチェック機能が、科学は信頼に足るという確信をより確かなものにしてくれます。論文の内容について素人には判断できなくても、専門家が競争原理に基づいて互いにチェックしている体制があるのだから、信頼に足ると考えることができる、というわけです。

①しかし本当にそうでしょうか。そうした「専門性」はなぜ無条件に信じられるのでしょう。トーマス・クーン（一九二二―九六年）という科学史研究者の議論を参照してみましょう。ここでも歴史を振り返ることが重要です。今日私たちがよく知っている高い専門性に依拠した研究体制は、クーンによれば、科学のI的なあり方ではありません。それは「通常科学」と名づけられる特殊な様態だといわれるのでした。

通常科学とは、クーンによれば、すでに出来上がった「パラダイム」を前提にした「パラダイムとは、科学研究において科学者に共有されている規則や基準のことです。②通常科学は、パラダイムを前提にした上での「パズル解き」にすぎず、それによって新しい考え方をもたらすことはないとクーンは主張しました。こうしたクーンの議論は、一見すると「科学」に対する信頼を揺るがすcダイタンな批判のようにも聞こえます。あるいは単に悪意をもって外野から投げられるナイフのようなものにすぎないと思えるかもしれません。

しかし、クーンの議論は、科学者たちから現場をよく分かっているとして支持されました。クーンがいうことの方が、科学者の実態に近いと見なされたのです。もしそうだとすれば、専門外の人間は実際には何を信頼しているのでしょうか。クーンのいう「通常科学」の内実をもう少し立ち入って見ていくことにしましょう。

今日の科学プロジェクトは、しばしば大きなお金と大掛かりな装置を必要とします。しかし、失敗する可能性のあるものに思い切って大きな＊4リソースを割くことには、ふつうリスクが伴います。無駄になるかもしれないのに、そんなお金と労力が費やせるかというわけです。しかし、通常科学には、広い意味ではそのリスクは存在しません。巨額の装置の導入は「それを使えば重要な事実を見つけられる、とパラダイムが保証するから、研究者たちが取りかかるもの」になっているからです。パラダイムを前提にする限り、こういう結果が出なければおかしいという「予測」があります。そのとき、パラダイム自体の正しさは前提になっていて、dギ

（その６）

ンミの対象にはなりません。

そのようなかたちでパラダイムの「正しさ」が確信されている状態であれば、どれほど巨額の予算をかけた実験でも決して無駄になることはありません。仮に実験結果がパラダイムの予測に合致しなかったとしても、「なぜそうなったのか」という新たな課題が見出されたと考えられるからです。予測と結果の不一致は、パラダイムを疑うことに向けられるのではなく、パラダイム上の検討課題を増やすことになります。そこでは実験の失敗もまた広い意味で科学の「進歩」に貢献したものと見なされるのです。

では、そのときの「進歩」とは、どういうものなのでしょうか。通常科学がパラダイムを前提にして浮かび上がる予測を実際に確かめるものだとすれば、「答え」はあらかじめ与えられている問題を解くことは「進歩」といえるのでしょうか。「通常科学」が、あらかじめ設定された「答え」に辿り着くための努力である限りにおいて、それは「パズル解き」と同じだとクーンがいうのも、そのためです。ルールが設定され、解答があることを保証された問題を解く科学者は、問題設定に悩む必要がありません。彼らはただ、パズル解きの速さを競うだけです。だとすれば科学の「進歩」と呼ばれるものは、パラダイムを下絵にしたジグソーパズルのピースを埋めていくようなものになるでしょう。そこでは、下絵自体を書き換えることは想定されていません。ゲームのルール自体を変えれば、個々の科学者の研究の「意味」は宙に浮いてしまいます。ジグソーパズルのピースは、それだけでは絵をなさないのです。

かといってパラダイムの下絵がない状態で与えられたピースを組み上げることで何らかの「絵」をつくることができるかといえば、それも困難といわざるをえません。「科学者」になるための訓練に、そうした能力を養うことは含まれていないからです。「通常科学」の問題がパズル解きだとすれば「科学者」になるために必要なのは、パズル解きの訓練になります。より早くパズルを解く能力を身につけるには、パラダイムの正しさを検証して知を積み上げる訓練より、パラダイムを前提にした上で効率よく学ぶことを優先されます。実際、科学者になるための教育には主に「教科書」が用いられ、その分野を基礎づけるような独創的な科学論文が使われることはありません。基盤となる知をそれぞれの科学者が自分で確かめながら進むより、その正しさを前提とした上で［II］的に学ぶ方が、学習効率は高いと見なされるのです。

しかし、そうすることで科学者は「そのパラダイムへの信頼を教えこまれ、それを変えようと志す科学者はほとんどいない」ことになります。③こうした教育は、特定のパラダイムの枠組みを思考の型として嵌め込むものになるわけです。その教育は「しかし、通常科学的研究、教科書の定める伝統の中でのパズル解きのためには、これで科学者としての道具立てを十分与えた」ことになります。科学の「専門家」とは、そうしてパラダイム自体を見直すことにかけては何の教育も受けていない人々を指すようになるのです。

「科学」への信頼の基盤は、専門家同士の相互チェックに見出されると先にいいました。しかし、そこでの「専門家」とは、特定のパラダイムを共有する科学者集団を意味しています。クーンがいうように、科学者たちは「個人の創造的仕事が、自分の同業者に対してのみ向けてなされ、仲間うちだけで評価されるというような職業集団」を形成します。その「仲間うちの評価」が、専門家同士の相互チェックと呼ばれるものの正体なのです。もちろん、科学者たちが馴れ合いで論文のeシンサをしているということではありません。科学者たちはむしろ、通常科学のパズル解きの中で互いに競争しながら、互いの成果を評価しているといえるでしょう。

しかし、その高い専門性は、見方を変えれば、分野外の批判から専門家を守る働きをしているようにも見えます。その分野で前提にされる知の枠組みは、内部で問われることがないだけでなく、外部からの批判も受け付けないものになっているのです。通常科学の営みは、専門の枠組みに閉じることで効率化するような体制の中で行われているのです。

そうしたかたちでの知の蓄積は、パラダイム自体の変化に対する強い「［III］性」を発揮することになるでしょう。パラダイムの上に積み重ねられた知は、パラダイムの枠の中で意味づけられるものですから、自分の研究の「意味」を失わせるような研究は容易に受け入れることができなくなります。専門家間のピア・レビューのシステムは、この点に関しては、大きなマイナスとして作用するほかありません。自分たちの拠って立つ知の基盤を吹き飛ばすような革新的な論文は、「専門家」にとっては「とんでもないもの」としか評価できないのです。「科学者」としての業績が専門家間のチェックにのみ依存する体制を採る限り、そのような革新的な論文を書く人は最初から「科学者」として認められないことになるでしょう。

④パラダイムを前提にした科学の「進歩」は、その意味で、パラダイム自体を変化させていく知の更新をもたらすものへの本質的な反発をもつものになっているのです。

＊1　人文学…哲学・文学・歴史学などの人間文化を考究する学問分野。
＊2　恣意的…根拠なく、その時の都合や思いつきで物事を判断する様子。
＊3　ピア・レビュー…研究仲間や同分野の専門家による評価や検証。
＊4　リソース…資源。

（荒谷大輔『使える哲学』より）

（その８）

問１　＝線部ａ～ｅのカタカナを漢字に直しなさい。

問２　Ⅰ～Ⅲにあてはまる言葉の組み合わせとして最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア　Ⅰ　普遍　Ⅱ　系統　Ⅲ　保守
イ　Ⅰ　普遍　Ⅱ　多角　Ⅲ　利便
ウ　Ⅰ　伝統　Ⅱ　系統　Ⅲ　保守
エ　Ⅰ　伝統　Ⅱ　多角　Ⅲ　利便
オ　Ⅰ　伝統　Ⅱ　系統　Ⅲ　利便

問３　――線部①「しかし本当にそうでしょうか」とありますが、ここで筆者はどういうことを疑問に思っているのですか。次の空欄に当てはまる形で説明しなさい。

「科学」とは、同じ知を有する専門家たちによってＡ（二十字以内）ものであり、また、専門家によって書かれた論文は、Ｂ（二十字以内）ものであるから信頼できるということ。

問４　――線部②「通常科学は、パラダイムを前提にした上での『パズル解き』にすぎず」とありますが、「通常科学」が「『パズル解き』にすぎない」とはどういうことですか。その説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア　通常科学はパラダイムを当然視することで、自らの研究に没頭し今までにない斬新な理論を導き出すことを目指すだけであるということ。
イ　通常科学はパラダイムの正否を問題視しておらず、研究の質よりも実験をいかに多くこなすかが重視されるものでしかないということ。
ウ　通常科学はパラダイムを絶対的なものとすることで、あらかじめ設定された結果をできる限り早く確かめるものでしかないということ。
エ　通常科学はパラダイムを疑うことをせず、想定外の結果が出たとしても事前の予測に無理にでも当てはめようとするだけであるということ。
オ　通常科学はパラダイムを守ることを第一に考え、まだ誰も考えたことのない複雑な理論を一つ一つ検証していくものでしかないということ。

問５　――線部③「こうした教育は、特定のパラダイムの枠組みを思考の型として嵌（は）め込むものになるわけです」とありますが、「科学者」は「こうした教育」によってどのようなことができなくなってしまうのですか。その説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア　従来通りの研究を時間に縛られることなく丁寧に実施し、今日の科学者が受け入れているルールの信憑（しんぴょう）性を再確認すること。
イ　既存の問題に取り組むのではなく自ら問題を提起して解答を導き、科学者の間で共有されてきた一定の秩序を再検討すること。
ウ　特定の科学者にのみ都合の良いように解釈されてきた規律を問題視し、時代の流れに沿った新たな規律を作り上げること。
エ　元々の規則や基準を確認することでより一層科学者の仲間意識を強固なものとし、科学以外の専門家の批判に立ち向かうこと。
オ　踏襲されてきた内容に再考すべき点があることを明確にして科学者が相互に批判し合い、従来の枠組みをなくしてしまうこと。

問６　――線部④「パラダイムを前提にした科学の『進歩』は、その意味で、パラダイム自体を変化させていく知の更新をもたらすものへの本質的な反発をもつものになっているのです」とありますが、どういうことですか。百十字以内で説明しなさい（句読点も一字に数えます）。

問７　本文から読み取れる内容の説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア　客観性を重んじ堅実に研究を進める科学者が現れないのは、教科書を使って効率的に学ぶことを強要されているからであり、筆者はそのような浅はかな科学教育のあり方を批判している。

イ　部外者を相手にせず専門家同士がお互いに評価をしあうことで失敗を隠蔽している「科学」は、客観性を欠く人文学よりも価値の低い学問なのではないかと筆者は疑念を抱いている。

ウ　多くの科学者たちは「パラダイム」の存在が科学の進歩を妨げているということに薄々気づいているが、異論を唱えることを許さない今日の学会の雰囲気に筆者は嫌気が差している。

エ　失敗することで新たな発見を見いだすことができるにもかかわらず、失敗することを初めから恐れて消極的な態度で研究に従事する今日の科学者たちの姿勢に筆者は失望している。

オ　多額の費用をかけた今日の科学実験に無駄がないと錯覚してしまっている背景には、「パラダイム」の存在が大きく影響しており、筆者はそうした「科学」の現状を懸念（けねん）している。

受験番号

二〇二二年度　大阪星光学院高等学校　入学試験解答用紙

国　語

一、

問1　a　　b　　c　　d　（る）　　e

問2　A　　B

問3

問4

問5

問6

問7

二、

問1　a　（それ）　　b　　c　　d　　e

問2

問3　A

B

問4

問5

問6

問7

問8